

ぜんほきょう NURSERY

2026
4
APRIL
No.396

特集

認定こども園研修会開催報告

認定こども園に関する調査結果から 読み解く現場の現状と課題



保育ネットワーク

社会福祉法人美友会 幼保連携型認定こども園すみよしこども園 (兵庫県明石市)

子どもの困りごとを解決し笑顔で楽しめる社会をめざすp.08

新連載 職員のこころのケアを考える p.10
～保育現場におけるメンタルヘルス～ (第1/11回)

公立保育所・公立認定こども園等の動き p.14
阿南市立宝田こどもセンター (徳島県阿南市)

国の動き p.12

新連載 子どもの発達・愛着について (第1/11回) ... p.16

ぜんほきょうの動き p.12

表紙写真「Enjoy with a smile -ひなたぼっこの1ページ」提供：すみよしこども園

全国保育協議会
<https://www.zenhokyo.gr.jp>



認定こども園研修会開催報告 認定こども園に関する調査結果から 読み解く現場の現状と課題

平成27年4月に「子ども・子育て支援新制度」により新たな施設としてスタートした認定こども園は、今では、保護者の就労状況にかかわらず子どもの成長を支える施設として認知度も高まり、施設数も大きく増加しています。

全保協においても、認定こども園の会員数は年々増加しており、全国の認定こども園のうち約54%が本会の会員であることから、本会では、認定こども園に関する活動を強化し、認定こども園に特化した要望や制度改革の提言を行うために令和6年度に「認定こども園に関する調査」を実施しました。

その調査結果を踏まえ、現場の実情と今後について考えた「認定こども園研修会」について報告します。

開催日：令和8年1月20日～21日（アーカイブ配信：令和8年2月10日～3月13日）

登壇者	※所属・役職等は開催時のもの	
I. 導入	伊藤 唯道	(全国保育協議会 副会長)
II. 運営編 ～解説～ ～実践報告～	山縣 文治 氏 篠崎 直人 氏	(大阪総合保育大学 特任教授) (平和の園 園長)
III. 人材確保・定着編 ～解説～ ～実践報告～	矢藤 誠慈郎 氏 岩淵 善道 氏	(和洋女子大学 教授) (水城保育園 園長)
IV. 教育・保育内容編 ～解説～ ～実践報告～	北野 幸子 氏 中島 章裕 氏	(神戸大学大学院 教授) (明照保育園 園長)

I 【導入】実態調査に基づく制度提言と全保協の動き（基調報告より）

全国保育協議会 副会長 伊藤 唯道

「子ども・子育て支援新制度」（以下、新制度）の開始から10年が経過した今、認定こども園はすべての子どもの育ちを支える場として全国に広がり、地域における子育て拠点として大切な役割を担うようになってきました。一方で、現場では事務の負担増大や人材確保の難しさが深刻化するなど、新たに見えてきた課題も多くあります。そこで全国保育協議会（以下、全保協）では2024年度に、保育所を含むすべての会員施設21,361か所を対象に「認定こども園に関する調査」（以下、本調査）

を実施しました。本調査では、全国における認定こども園の設置状況に加え、運営や教育・保育の取り組み、職員の働く環境などについて幅広く尋ねました（回答数5,766件、うち認定こども園2,114件）。本調査において明らかになった全国の実態と、寄せられた多くのリアルな声は、認定こども園の現状を見つめ直す手がかりとなるとともに、今後の制度や環境をよりよいものに変えていくために国に働きかける際の大切な基礎資料です。

園を運営する皆さんは、本調査結果を自園の現状と照らし合わせながら丁寧に読みとっていただきたいと思います。たとえば、自園の働き方は全国平均と比較して適正かどうか、取得すべきなのに取りこぼしている加算がないかどうかなどの確認

を行ったり、効率的な運営をしている園から経営のヒントを学びとって改善につなげたりすることができるでしょう。報告書を自園の“健康診断”のようなイメージで活用いただき、日々の実践を振り返るきっかけとしていただけることを願っています。

全保協としては、本調査結果を踏まえ、地域で暮らす乳幼児がいずれの施設に通っていても質の高い保育が等しく保障されるよう、幼保連携型認定こども園教育・保育要領等の3つの要領・指針の一本化を最重要課題のひとつとして、国へ強く要望していきます。また、新制度施行から10年が経過したいま、施設種別間で公定価格や加算に矛盾が生じている現状があります。制度全体を総括して制度間の不整合を早急に是正し、保育現場の混乱を防ぐことも最優先課題のひとつであると考えています。さらに、認定こども園への移行の障壁となる“ローカルルール”の撤廃を求めていくことも欠かせません。現状では、国の基準を満たしていても自治体の規制によって認定こども園へ移行できないケースが多発しています。国から自治体へ周知徹底していただき、事業者が移行を希望する場合には制限することがないように求めています。もちろん、他団体との協働体制を強化して保育施策・政策提言力を最大化していくことも継続していきます。

全保協には全国の認定こども園の54パーセントが所属しており、認定こども園を最も多く擁する組織です。2024年度からは本会内に「認定こども園部会」を常設化し、認定こども園に特有の課題解決に向けた体制も強化しています。日本最大の認定こども園組織として一丸となって声をあげ、「こどもまんなか社会」の実現をめざして提言していきますので、ぜひ会員の皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

II 調査からみえる課題と保育現場の実情【運営編】

解説 競争の時代における持続可能な施設運営とは

大阪総合保育大学 特任教授 山縣 文治 氏

認定こども園への移行については事業者の判断に委ねられていますが、近年の著しい少子化のなかで、事業者間の競争は必然的に加速しています。全国的に見ると、子どもの数が多い都市近郊区や幼稚園においても、近い将来、経営難になることは避けにくく、事業閉鎖や認定こども園への移行が進む可能性が高いと考えられます。また、幼稚園がない、あるいは利用しづらい地域における1号認定の子どもの育ちを保障する役割も、認定こども園が担っていることを忘れてはなりません。このような競争社会のなかで、現状の保育所が経営持続力を備えているかどうか、あらためて問い直す時期がきているといえるでしょう。社会的課題や地域の実情を踏まえたくえで、組織として認定こども園への移行を積極的に検討していく必要があります。

他方で、本来は事業者に委ねられるべき移行の判断が、行政の方針や意向に大きく左右されている現状もあります。超少子化社会のなかで持続可能な運営を実現していくことは困難ですが、だからといって、国や自治体の財政状況が大きく好転することは見込みにくく、各事業者が自らの経営力を高めていくことが、これまで以上に求められています。「行政の方針に従っていればよい」という考え方は、子どもが増加し、経済が成長していた時代の前提に基づくものです。運営が困難になった際に行政が支えてくれることを当然とする認識は過去の産物と認識し、そのような前提に依存するリスクを避け、経営の現状を慎重に見極めていく必要があります。制度面においては、学校法人以外の経営主体でも幼保連

そのような学生に対して、「保育園はおもしろくない場所」という印象を残すのか、「保育はすばらしい仕事」と実感してもらうのかでは、大きな違いがあります。実際に、実習をきっかけに保育者を志すようになる学生も多くいるので、保育の価値や意義をしっかりと伝えていくことも、私たちに求められている役割のひとつであると意識しています。人材確保の視点から実習をとらえることも大切ですが、それ以上に、貴重な社会経験の場として、どのような学生にも保育の魅力や本質を丁寧に伝える姿勢が重要であると感じています。

なお、実習における体験や感想などは、学生同士の口コミとして広がり、翌年以降の人材確保にも大きく影響します。実習を通して「また園に来たい」「ここで働きたい」と感じてもらうことは、結果として人材の定着にもつながっていきます。実習を一過性の受け入れではなく未来につながるかわりとしてとらえていくことが、大切なのではないのでしょうか。

IV 調査からみえる課題と保育現場の実情【教育・保育内容編】

解説 すべての子どもに保育保障と専門職とのかわりを

神戸大学大学院 教授 北野 幸子 氏

本調査における教育・保育内容に関する回答では、各園が大切にしている点として、次の3点が多く挙げられました。「主体的な活動の重視」「自然体験等の工夫」「個別最適化・一人ひとりの子どもへの配慮」です。その一方で、「外部講師の導入のあり方」や、「保育専門職としての研修を通じた個々の力量向上」など、保育の質そのものをいかに高めていくかが、課題として問われていることが見えてきました。

こうした状況を踏まえ、格差是正の観点から乳幼児教育・保育の重要性を考えると、いくつかの基本的な視点があらためて浮き彫りになってきます。ま

ず、子どもの権利保障として、地域に育つすべての子どもに教育・保育が保障されることです。そして保護者だけでなく、専門職である保育者と子どもとの相互作用が十分に保障されることが欠かせません。感情の受け止めに対して非常に敏感である乳幼児にとって、保育者が受容的・共感的にかかわることは、0歳児から大きな影響を及ぼします。専門職としてのかかわりが、その後の子どもの社会性や学びにつながることは、さまざまな研究で示唆されています。さらに、保育施設がインクルーシブな環境として多様なニーズに応え、一人ひとりの個性に応じた支援を行うこと、家庭や地域での経験とつながりをもちながら子どもの発達を支えること、そして、それらを支えるためのガバナンスや財源、関連政策との整合性を確保することが重要です。

一方で、現在の幼児の遊びや生活をめぐっては、中央教育審議会等で以下のような厳しい指摘もされています。「図的に用意しなければ、幼児の発達に必要な、さまざまな人や物と直接的・具体的にかかわる体験を十分に確保することが困難になっている」「一部の幼児教育施設においては、幼児の興味・関心ではなく、SNS等からの偏った情報やそれらに影響を受けた一部の保護者のニーズを優先するなどし、幼児の発達にふさわしくない教育活動が行われているとの指摘がある」などです。これらの懸念が国から明確に示されている現状を踏まえ、私たちはあらためて「保育は子どもの権利保障の最後の砦である」という認識をもつ必要があります。認定こども園で働く専門職として、子どもに何を保障しなければならないのかを問い直し、教育・保育の内容を見つめ直していくことが、いま強く求められています。

実践報告 接続期の「学び」の共有と世代間交流

明照保育園 園長 中島 章裕 氏

認定こども園における教育・保育内容の実践と

して、小学校との接続は重要なテーマのひとつです。自園では架け橋期プログラム（アプローチカリキュラム）の作成や、小学校との連携会議、交流活動を通して、「学びに向かう力」を育てる取り組みが進められています。実際に小学校の教員の皆さんと交流するなかで見えてきたのは、「学び」という言葉のとらえ方の違いです。小学校における「学び」は、教科から得られるものが前提となる一方で、園における「学び」は、遊びや生活のなかから得られるものが前提です。この違いを共有し、理解し合うことが、よりよい接続の基盤となります。当園では、互いが参加できる授業参観や保育参観を行うなど、交流の機会を積極的に増やしています。卒園した子どもたちが学校でがんばる姿を直接見ることは、保育者にとって大きな喜びであり、自らの保育を振り返る契機にもなっています。しかし同時に、かたちだけの交流にとどまらないための仕組みづくりや、小学校側の多忙化による連携の難しさ、カリキュラムの体系化といった課題も明白になってきました。当園に併設されている放課後児童クラブでは、小学校6年生までの子どもが日常的に集い、園児とのかかわりのなかで育ち合う姿が見られます。年長児や高学年の子どもが自然とリーダーシップを発揮し、「ありがとう」と言われる経験を重ねることで、責任感や自己肯定感が育まれていきます。放課後児童クラブを通して0歳から12歳までがともに過ごす環境は、貴重な場となっています。

さらに、当園では不登校の子どもを支援するフリースクールの取り組みも実施しています。そこでは、不登校の子どもたちが園児とのかかわりを通して、安心感を得ている姿が見受けられます。「自分はひとりではない」というメッセージを受け取りながら、少しずつ学校とのつながりを取り戻していく子どももいます。実際に、こうした経験を経ること

で徐々に保育者をめざすようになり、職員として当園に戻ってきてくれた事例もあります。認定こども園は、「教育と保育の統合」を実現する場として、子どもの育ちを長いスパンでとらえて実践を積み重ねていくことが可能な場です。保育者自身の学びと組織としての取り組みを通して、地域とともに子どもの育ちを支えながら、広く発展していくことが重要だと考えます。

V 認定こども園の未来のために

全国保育協議会 副会長 伊藤 唯道

私たちはこれまで40年にわたり、幼保一元化をめざして歩んできました。しかし、気づけば現実には、三元化ともいえる状況が生まれています。本来であれば、よりいっそう一元化に向けた取り組みをすすめる必要があったといえるかもしれません。一方で、少子化という避けることのできない大きな流れは、結果として制度のあり方そのものを変えていく力をもっています。今後、幼稚園の減少や保育所の経営難がすすむなかで、幼保連携型認定こども園へと集約されていく可能性は高いと考えられます。そのような時代において、あらためて私たちが大切にしたいのは、「養護」と「教育」という言葉の意味です。このふたつは切り離されるものではなく、子どもの育ちを支える根幹として深く結びついています。その重みを自覚しながら、これからの教育・保育のあり方を問い続けていくことが求められています。

認定こども園部会としては、来年度、全国認定こども園協会との連携を深め、さまざまな取り組みをともにすすめていきたいと考えています。認定こども園としての要望もしっかりと国に届けていきます。今後も研修会等を通してともに学び、歩みを重ねていきましょう。

